大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	鳥の目・虫の目・魚の目の旅	場所	函館市、長崎市

政治や経営と同様、地域づくりを考える上では、まずは鳥のように地域全体を俯瞰し地域の状況を把握し、次に虫のように小さな目で地域の状況を知り、魚のように潮流（時代の流れ）を読んで課題を見つけることは重要である。具体的には、地域全体を俯瞰できる視点場（展望空間等）から地域特性を把握し、地域に入って具体的な現況や課題を把握することになる。

例えば、高低差のある地形が特徴である長崎市では様々な視点場が存在し、美しい夜景が大きな魅力となっている（鳥の目）。一方、高台にある住宅地を歩いてみると空き家が増加していることがわかる（虫の目）。それは高台や坂道が魅力である一方、高齢社会の課題を端的に物語っていると言える（魚の目）。また、最近では国の登録有形文化財であった富貴楼や江崎べっ甲店の跡地にはマンションの建設や計画が進み、高台から都心部への人口の移動が進んでいることがわかる。

函館市　立待岬付近から見た市街地（左）、五稜郭タワーから見た五稜郭と市街地（右）

長崎市　稲佐山にあるホテルから見た夜景（左）、グラバー園から見た市街地（右）

長崎市　代表的な坂道であるオランダ坂（左）、マンション建設が予定されている江崎べっ甲店（右）

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	一つひとつのストーリーの積み重ねを実感する旅	場所	広川町、熊本市

筆者が紅葉の時期によく訪問する広川町太原(たいばる)のイチョウ並木は、農業を営む丸山元運(もとゆき)さんが 23 年前に奥様が亡くなられた後に、長年ブドウ栽培で使っていた畑の一部をイチョウに植え替えた場所である。植えた当初は高さ30～40㎝だった苗木も今では7～8mまで成長し、約 80 本の並木として、今では多くの人々が訪れる「紅葉の名所」となっている。奥様が亡くなられる直前まで2人で紅葉狩りに行くのを楽しみにしていたとのことで、丸山さんと亡き奥様の想いが込められている。

また、熊本市上及裏通りの「トタン屋根のケーキ屋 ア・ラモート」の店主・新本高志さんは 30 年以上自転車のペダルをこいで、丹精込めて作られたパウンドケーキだけでなく、地域の方々に元気をお届けしている。熊本市内だけでなく、益城町や阿蘇、八代、天草、そして福岡県内にも配達することもあるそうだ。夢の実現に向けて頑張っている姿や、人と人との出会いやつながり、笑顔を大切にされている新本さんから、筆者はいつもエネルギーをもらっている。

丸山さんや新本さんのような一つひとつのストーリーの積み重ねや人と人とのつながりが、地域づくりにつながっていくのだと確信した。

広川町太原(たいばる) 紅葉の名所となったイチョウ並木

熊本市 トタン屋根のケーキ屋 ア・ラモート

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	平和の大切さを実感する長崎巡礼の旅①－１	場所	長崎市

長崎大司教の高見三明氏の言葉に『巡礼とは、すべての人が平和を共有できる世界が来ることを願う「心の旅」なのではないでしょうか。』とある。宗教的迫害や原爆など、様々な苦難を見てきた長崎を訪問することは、平和の大切さを実感できる絶好の機会であり、そうした機会を求めて国内外から多くの方々が長崎巡礼を行っている。

筆者も世界遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」や原爆関連の施設等を巡礼することで、時間を遡って当時の人々の生き方に想いを馳せ、高見大司教の言われるように「なぜ苦しまなければならなかったのか」「同じような不幸を二度と繰り返さないようにするには何をしなければならないのか」自分なりに考えている。

「被爆十字架」の返還式が行われ、ウィルミントン大学平和資料センターのターニャ・マウス所長（右）から、高見三明・カトリック長崎大司教（中央）と信徒代表の藤田千歳さんに渡された＝７日午後、長崎市のカトリック浦上教会、小宮路勝撮影

被爆十字架 長崎に帰る　米国から

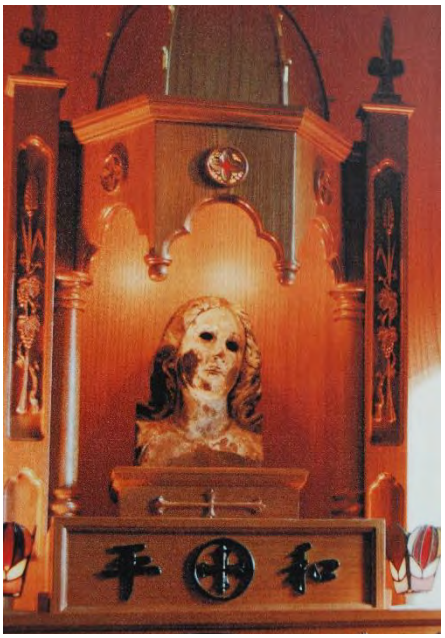
2019.8.8 朝日

米国による原爆投下で崩壊し崎市の浦上天主堂のがれきの中つかり、米国で保管されていた「十字架」が7日、被爆から74年て浦上教会に返還された。十字手にしたカトリック長崎大司教高見三明大司教(78)は「人間のさを訴えると同時に、希望を与くれる。生きていてくれてよか、被爆者は亡くなっても、語るが爆の証人になってくれる」と話し

▼32面＝「原爆作った愚かさ伝え

浦上教会などによると、十字1930年代半ばから旧天主堂あった。45年秋から長崎に駐留当時の山口憲次郎司教（故人）交を結んだ米海兵隊員のウォル・フークさん（2010年死去譲り受けたとされる。82年、米ルミントン大学平和資料センタ寄贈された。十字架を返還したターのターニャ・マウス所長はの十字架は核兵器を保有する米各国政府にその使用をやめるよしている。浦上に返還することの新たな意味が見いだされるだろと話した。（榎本瑞希、田井中雅

2019 年８月７日、「被爆十字架」が被爆から 74 年後に米国から浦上天主堂に返還される。
（2019 年８月８日、朝日新聞記事）



瓦礫の中から奇跡的に発見された「被爆マリア像」（現地案内板を撮影）

1945 年８月９日の原爆により倒壊した浦上天主堂（現地案内板を撮影）

被爆十字架返還の２日後の 2019 年８月９日の「原爆の日」に改めて浦上天主堂を訪問（上）。1945 年８月９日の原爆により崩れ落ちた北側の鐘楼は当時と同じ場所で物語る唯一の遺構（右）

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	平和の大切さを実感する長崎巡礼の旅①－２	場所	長崎市

長崎大司教の高見三明氏の言葉に『巡礼とは、すべての人が平和を共有できる世界が来ることを願う「心の旅」なのではないでしょうか。』とある。宗教的迫害や原爆など、様々な苦難を見てきた長崎を訪問することは、平和の大切さを実感できる絶好の機会であり、そうした機会を求めて国内外から多くの方々が長崎巡礼を行っている。

筆者も世界遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」や原爆関連の施設等を巡礼することで、時間を遡って当時の人々の生き方に想いを馳せ、高見大司教の言われるように「なぜ苦しまなければならなかったのか」「同じような不幸を二度と繰り返さないようにするには何をしなければならないのか」自分なりに考えている。

世界遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産である大浦天主堂（左）
同構成資産である外海集落にある出津教会（右）

二十六聖人殉教の地に建つ日本二十六聖人記念館

信仰と建築が一体となった日本二十六聖人記念聖堂　聖フィリッポ教会

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	平和の大切さを実感する長崎巡礼の旅①－３	場所	長崎市

長崎大司教の高見三明氏の言葉に『巡礼とは、すべての人が平和を共有できる世界が来ることを願う「心の旅」なのではないでしょうか。』とある。宗教的迫害や原爆など、様々な苦難を見てきた長崎を訪問することは、平和の大切さを実感できる絶好の機会であり、そうした機会を求めて国内外から多くの方々が長崎巡礼を行っている。

筆者も世界遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」や原爆関連の施設等を巡礼することで、時間を遡って当時の人々の生き方に想いを馳せ、高見大司教の言われるように「なぜ苦しまなければならなかったのか」「同じような不幸を二度と繰り返さないようにするには何をしなければならないのか」自分なりに考えている。

悲惨な戦争を二度と繰り返さないという誓いと世界平和への願いを込められてつくられた平和公園（左）
恒久平和と隣人愛の精神を発信し続けた永井隆先生の病室兼書斎（右）

原爆で約 1,300 名の児童や教師が亡くなった山里小学校（左）
爆心地公園では被爆した浦上天主堂の壁の一部が移設されている（右）

原爆の脅威を伝える山王神社の一本足鳥居（左）、原爆に耐え奇跡の復活を遂げた被爆クスノキ（右）

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	平和の大切さを実感する長崎巡礼の旅②	場所	長崎市

長崎市内には長崎四福寺と呼ばれる唐寺がある（崇福寺、興福寺、聖福寺、福済寺）。このうち福済寺は長崎の唐寺の中でも大きな寺院であったと言われ、戦前には現在の国宝にあたる特別保護建築物に指定されていたが、第二次世界大戦中の原爆により焼失し、現在は原爆被災者と戦没者の冥福を祈って建てられた万国霊廟長崎観音が長崎の市街地を見守っている。

貴重な文化遺産は一物も残らず焼失したが、原爆の爆風で焼け落ち、片耳になった雲版（寺で食事等の合図のために鳴らす鐘）や原爆に耐えて生き続けている福済寺ソテツが今でも被爆の歴史を伝えている。

戦前の福済寺（出典：長崎名所唐寺福済寺絵はがき）

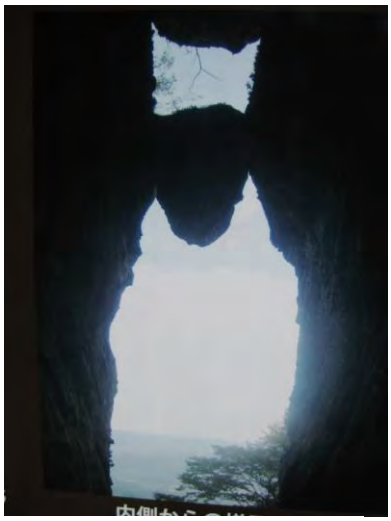
長崎の市街地を見つめる観音立像（左）、文殊般若の門と鎮魂の鐘（右）

爆風で焼け落ち、片耳になった雲版（左）
原爆に耐えて生き続け、今でも被爆の歴史を伝える福済寺ソテツ（右）

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	前向き思考の旅	場所	南阿蘇村

免の石は、阿蘇南外輪山の岩山の空洞に挟まっていた巨大な石で、宙に浮いて何万年もここに留まってなかなか落ちない石であった。そのため、受験者や就職等の合格を祈願する人、また、岩と岩を繋いでいたため、縁結び等のご利益があるといわれ、パワースポットとして多くの人が訪れていたが、2016年4月の熊本地震で震度7の激震には耐えられず、落石した。

しかし、落ちた後の空洞は、まるで猫が遥か向こうに見える阿蘇五岳の根子岳を眺めている姿になり、落ちた石は砕けずに下方 50mの場所に留まっていた。地元の人々は、「受験生や就職祈願者の身代わりになって、石が落ちてくれた」と前向きに考え、石が落ちた後の空洞の姿を招き猫に例えてPR していた。私は、逆転の発想に思わず猫のように「ニャッ（ニャー）」としてしまった。これこそ「ピンチをチャンスに」という前向き思考の考え方であろう。

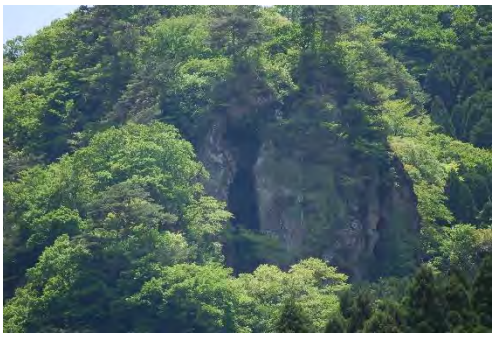


落石前の免の石

yahoo 画像（左2枚）、熊本地震前の現地の案内板の写真（右）

落石後の免の石を招き猫に例えてPR

（南阿蘇村観光協会チラシより）



落石後の免の石

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	一人一花を実感する旅①	場所	小布施町

「一人一花運動」という言葉は、「市民主体の花のまちづくり」の一環として福岡市が 2018 年から推進しているので、福岡市民にとってはよく耳にする言葉である。その先駆的な事例は、地域全体で花のまちづくりを展開している長野県小布施町であり、メインストリートだけでなく、小さな空き地や民家の軒先、畑の一隅でも心のこもった美しい花壇に出会うことができる。

また、「丹精込めた庭を、より多くの人と楽しもう」「出会いや交流を通じて、花と緑があふれる豊かな生活文化を高めよう」という願いを込めて、個人の庭を公開する『小布施オープンガーデン』が推進されている。2000 年から始まったオープンガーデンは日本で最初の取り組みであり、現在までに約 130 箇所の個人庭園が公開されている（※P279 の「四季を実感する旅」でも紹介済）。

小布施町 花のまちづくり

小布施町 オープンガーデン

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	一人一花を実感する旅②－１	場所	大分市、福岡市

筆者は 2018 年 12 月に大分市アートプラザを訪問した際、障がいのある方々が制作した作品の展示会を見る機会があり、その時の「ひとり一人の花を咲かせよう」という言葉が大変印象に残っている。それは、異なる環境にあるすべての人々の生き方が尊重される社会の実現を意味している。

花をよく見ると同じ種類の花でも同じものは一つもなく、異なる個が集積して魅力ある花畑や樹木、並木を形成していることがわかる。それは、人間社会の「個と組織」の関係と類似している（異なる個の集積が魅力ある組織を形成する）。「一人一花」は花の世界だけでなく、人間の世界でも当てはまり、組織のあり方を考える上で参考になるのである。そうした視点で花を見て回ることも楽しいものである。

大分市 障がいのある方々が制作した作品の展示会（大分市アートプラザ）

福岡市西区豊浜 枝垂れ梅

福岡市 能古島アイランドパークの菜の花畑

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	一人一花を実感する旅②－２	場所	長崎市、南阿蘇村等

筆者は 2018 年 12 月に大分市アートプラザを訪問した際、障がいのある方々が制作した作品の展示会を見る機会があり、その時の「ひとり一人の花を咲かせよう」という言葉が大変印象に残っている。それは、異なる環境にあるすべての人々の生き方が尊重される社会の実現を意味している。

花をよく見ると同じ種類の花でも同じものは一つもなく、異なる個が集積して魅力ある花畑や樹木、並木を形成していることがわかる。それは、人間社会の「個と組織」の関係と類似している（異なる個の集積が魅力ある組織を形成する）。「一人一花」は花の世界だけでなく、人間の世界でも当てはまり、組織のあり方を考える上で参考になるのである。そうした視点で花を見て回ることも楽しいものである。

長崎市　紫陽花（左：出島、右：眼鏡橋付近）

南阿蘇村　一心行公園西側のひまわり畑

福岡市　能古島アイランドパークのコスモス畑

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	こだわりの書店とアートギャラリーを巡る旅①	場所	熊本市、大分市

新聞や雑誌に紹介された書店やアートギャラリーを訪問することも最近の筆者のまち旅のテーマの一つである。その代表的な書店が熊本市の橙書店である。最初に訪問したのが 2015 年5月で玉屋通りと呼ばれる小さな路地沿いにあった頃である。熊本地震前に撮影された映画「うつくしいひと」でもロケが行われた。熊本地震で現在の練兵町に移転したが、オーナーの田尻久子さんのこだわりの本が所狭しと並んでいる。「オレンジ」と呼ばれるカフェも併設しており、常連客のコミュニケーションの場ともなっている。

また、大分市のカモシカ書店も筆者が大分出張時によく訪れる書店であり、新刊書店と古本屋とカフェが一つになったリラックスできる空間である。こちらもオーナーのこだわりの本が並び、レトロな雰囲気が時代を感じさせてくれる。

本屋探見

橙書店

@熊本市

コーヒーの香り 心通わすひとときの

初めて入る時は、ちょっとためらうかもしれない。熊本市の中心部にある古い雑居ビル。階段は何だか薄暗い。でも、2階にある扉を開けると、コーヒーの香りがふわり。暖かな色合いのあかりに照らされて、木製の本棚が並んでいる。

橙書店。別名は、カフェ「オレンジ」。店主の田尻久子さん(50)が2008年、元々経営していたカフェの隣に書店を開いたのがはじまり。3年前、熊本地震で被災したのを機に、一つにまとめて移転した。

翻訳小説や人文書を中心に約2千冊。取次会社を通さず、田尻さん自身が選ぶ。多くは出版社から直接買い取って仕入れる「返本できると、私の場合、本選びに甘えが出そうなので」

カフェスペースのカウンターで一服しながら、おすすめの本をたずねる人も。「熊本旅行の間に読めるものは」一親の介護の息抜きに。田尻さんは少し考えて、すぐそばの本棚から一押しの一冊を差し出す。

「私もお客さんから教えてもらいます。お客さん同士、好きな本の話で盛り上がることもありますね」

くつろいだ雰囲気の店内で、詩人の伊藤比呂美さんが朗読会を開き、思想史家の渡辺京二さんが講演することも。作家で建築家の坂口恭平さんは、書斎がわりに原稿を書きに来る。

田尻さんは言う。「経営はいつもぎりぎり。すべての人の好みに対応できる書店ではありませんが、扉を開けて入って来てくれる幾人かの心に響けばと思って続けています」（上原佑介）

カフェスペースで常連客と談笑する田尻久子さん（右）＝熊本市中央区

売れ筋

●『みぎわに立って』田尻久子著（里山社） 橙書店の店主によるエッセー集。個性的なお客さんに加えて猫や蜂までやって来る。そんな日常を柔らかな筆致でつづる。

●『苦海浄土』石牟礼道子著（講談社文庫） 生の尊厳を求める水俣病患者を描いた名著。「石牟礼ファンのお客さんは多いです」と田尻さん。

熊本市中央区練兵町54松田ビル2階。☎096・355・1276。午前11時半～午後8時（日曜は午後5時まで）。火曜休み。

熊本市 橙書店（左：橙書店に関する新聞記事(2019.5.27 朝日新聞)、右：書店内部）

大分市 カモシカ書店

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	こだわりの書店とアートギャラリーを巡る旅②	場所	長崎市

筆者は長崎市の田川憲アートギャラリー「Soubi’56」にも 2019 年 12 月の新聞記事を見て以来よく訪問している。田川憲氏は長崎にまつわる数多くの作品を残した版画家で、洋館や居留地の景観保存という願いをよそに、戦後の開発で多くの洋館が失われたことを背景に、失われゆく洋館や居留地等の長崎の風景を「版画として残す」ことを使命として、異国情緒あふれる版画作品として世に出したことで知られている。

現在はお孫さん夫婦が築 70 年のビルの一室を借りてアートギャラリーを開設し、長崎をこよなく愛した田川憲氏の版画を通して古き良き時代の長崎の魅力を伝えるとともに、都市化の進展により次第に減少している歴史的建造物の保存の活動にも携わっている。筆者も福岡県内の町並み保存の活動に関わっており、微力ながらこうした活動をサポートできたらと考えている。

令和元年）12月2日（月）　朝日新聞（夕刊）

隠れ家の先 長崎愛した版画

木版画家・田川憲の作品展示室

異国情緒あふれる長崎の街並みを愛し、描き続けた長崎の木版画家、田川憲（1906～67）の作品を集めた展示室が、長崎市出島町にできた。築70年ほどの古びたビルの一室で、その魅力を孫夫婦が静かに伝えている。（田中瞳子）

戦後まもなく建ったコンクリート打ちっ放しのビル。ちょうつがいで留められた色あせた扉を開くと、1階の通路の壁には「そうび」とかかれた木製の看板がひとつ。隠れ家のような一室に出合う。

田川の孫の俊さん（49）と妻でオーナーの由紀さん（48）が昨年1月に開いたアートルームだ。店の名「Soubi・56」は、田川が1956年に描いた作品「十字架薔薇の窓」から。大浦天主堂の側面のステンドグラスを描いたこの作品の雰囲気とタイトルの響きにひかれた。展示するのは田川の作品や関連する手記で、テーマと作品は2カ月に1度替えている。

田川は長崎市で生まれ、東京や大分、上海などでの生活を経て終戦後に帰郷した。生涯にわたって居留地の洋館や石畳、唐寺など長崎の街並みをモチーフに多くの木版画を残した。

築70年のビルの一室　孫夫婦、魅力伝える

包装紙やお菓子の箱などさまざまなお店のパッケージデザインも手がけている。長崎では日常的に目にする機会が多かったが、没後52年たち、生前を知るファンも高齢化した。俊さんは、祖父の作品をまちで見かけたり、語られたりする機会が減っていると感じるようになった。「常に祖父の版画を見られる場所をつくろう」と思い立った。

「50年以上前につくられた作品だから、少しでも年季のあるところで展示したほうが自然なのでは」。そんな思いで空き部屋を探し、田川が多くの作品を描いた「出島エリア」で、この古びたビルと出合った。

外観からはそこに展示室があるようには見えず、迷ってしまうお客さんもいる。一方で、古いビルのたたずまいにひかれて偶然入ってきて、田川のファンになってくれた人たちもたくさんいた。「芸術とはもっと身近なものだ」と書き残した祖父の思いを受け継ぎ、俊さんは「原画を間近で見て、芸術作品を身近に感じてもらいたい」と願う。由紀さんは「地元の人には『あたりまえ』になっている長崎のよさ、おもしろさに気づき、語ってもらえる場になれば」と話している。

田川の孫、俊さんは「長崎の『あたりまえの風景』を多く残してきた祖父の作品も、この本を読んでから見るとまた違って見える。新たな発見を楽しめる小説です」と話した。

税抜き1800円。問い合わせは左右社（03・3486・6583）へ。

上 銘菓「南蛮おるごおる」のパッケージになっている田川憲の版画
下 孫の田川俊さん（左）とオーナーの由紀さん

田川憲と棟方志功　2人を描いた小説出版

川憲と青森出身の棟方志功、東西の2版画家を描いた小説「心を彫る」が8出版された。著者は、東京・渋谷にあ小劇場「ジァン・ジァン」の元劇場主の高嶋進さん(87)＝山梨県北杜市。文学のイメージを版画におこした2人の共通点を描いている。

金子光晴の詩を連作版画「十字架鮫（さめ）」に表現した田川と、ドイツの哲学者・ニーチェの「ツァラトゥストラはかく語りき」を板に彫り込んだ棟方。2人の共通点に着目した高嶋さんは「本や新聞が読まれなくなり言葉にこだわらなくなった現代に、言葉に命をかけて死んでいった2人の芸術家をのこしたいと思った」と話す。

田川憲アートギャラリーSoubi’56 に関する記事（2019.12.2 朝日新聞）

田川憲アートギャラリーSoubi’56

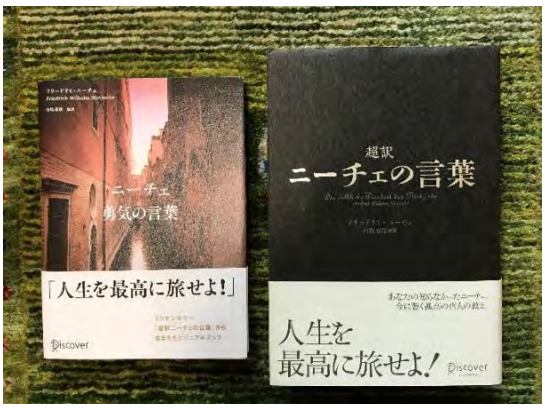
大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	本や画に魅了されてアートと歴史を巡る旅①	場所	東京都台東区

筆者は書籍で得た情報を基に「アート」「歴史」「旅」「生き方」「哲学」等をテーマに小さなまち旅を実践している。

書籍では、特に小説家・原田マハ氏の本に関心があり、興味を持って読んでいる。筆者が最初に読んだ原田マハ氏の本は、国立西洋美術館誕生に隠された奇跡の物語「美しき愚かものたちのタブロー」であり、ちょうど国立西洋美術館開館 60 周年記念「松方コレクション展」を見た頃である。この本を読んで以来、すっかり彼女のファンになっている。彼女の作品はアート小説が中心であるが、歴史や旅、生き方等の面でも参考になることが多い。

台東区　小説家・原田マハ氏を知るきっかけとなった国立西洋美術館での「松方コレクション展」

原田マハ氏の小説

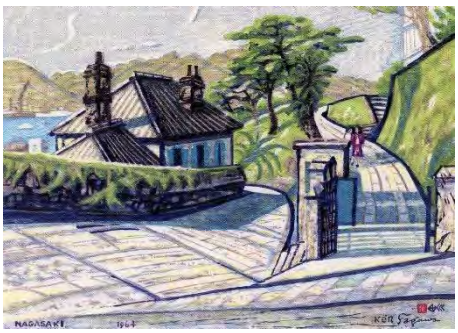


旅や哲学に関する書籍

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	本や画に魅了されてアートと歴史を巡る旅②	場所	長崎市

筆者の長崎への旅は、2018 年1月の福岡市役所の卒業旅行で長崎を訪問したことをきっかけに本格化する。それ以来、教会や寺社、町並み、港等をテーマに長崎ならではの小さなまち旅を実践している。また、2019 年 12 月に田川憲アートギャラリー「Soubi' 56」を訪問し、2018 年に長崎県立美術館で開催された「長崎の美術　田川憲展」の図録を入手後、その図録を基に改めて長崎ならではの風景を求めて、いろいろな場所を訪問している。

町並み保存の活動に関わっている筆者は、失われゆく洋館や居留地等の長崎の風景を「版画として残す」ことを使命として、異国情緒あふれる版画作品として世に出した田川憲氏の想いをいくらかでも感じることで、今後の活動につなげていきたいと考えている。



2018 年に長崎県立美術館で開催された「長崎の美術　田川憲展」の図録（左）、田川憲氏の作品（中、右）

長崎市　田川憲氏の作品を基に改めて崇福寺や聖福寺、オランダ坂、眼鏡橋等を訪問

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	こだわりの場所を定期的に訪問する旅①	場所	佐賀市

筆者にはこだわりの場所（お店、ペンション等）がいくつかあり、定期的に訪問している。これは「人」や「環境」「味」「その地域ならではの品ぞろえ」をテーマとした小さなまち旅である。

まずは佐賀市三瀬の珈琲豆専門店「珈道庵(こどうあん)」。こんな所にお店があるのかと思わせるほど奥まった緑深い場所にあるが、清流沿いに位置し、川のせせらぎや小鳥のさえずりが心地よい。建物の外観やインテリア、器にもこだわりが感じられ、いつ来ても季節感を満喫できる癒しの空間を提供している。そして何よりも、筆者はお店の方々との会話を楽しみにしている。都会の喧騒を離れ、心身ともにリフレッシュできる場所である。（現在は事情によりカフェは営業していないが、珈琲豆を購入すると美味しい珈琲を入れてもらえ、建物の中や清流沿いのテラスで飲むことができる）。

佐賀市三瀬 珈琲豆専門店「珈道庵(こどうあん)」

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	こだわりの場所を定期的に訪問する旅②	場所	大分市、長崎市

次は大分市の大分銀行赤レンガ館の１階にあるセレクトショップ「Oita Made Shop」。ここでは「大分の魅力が伝わる商品」「土地や作り手のストーリー」「Oita Made オリジナル商品」をコンセプトに、別府市の竹細工や八湯石鹸、日田市の梨ジャムや下駄、臼杵市の菓子、佐伯市のごまだしなど約 140 種類の厳選された県産品が販売されている。

また、長崎市の「まちぶら案内所もてなしや1号店」も長崎の歴史や文化、空気を伝えるセレクトショップ兼観光案内所で、波佐見町の波佐見焼、長崎市のびわ茶や手作りの祝儀袋等の厳選された県産品の販売とともに、県内の観光情報の提供を行っている。すぐ近くにある2号店では長崎ならではの食品や、空港や駅等の売店ではあまり売っていない通好みの「長崎のよいもの」を取り扱っており、海の幸コーナーも充実している。

大分市 Oita Made Shop

長崎市 まちぶら案内所もてなしや1号店

長崎市 まちぶら案内所もてなしや2号店

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	こだわりの場所を定期的に訪問する旅③	場所	八女市

最近よく訪問するのが八女市のアンテナショップ「うなぎの寝床」である。ここは「地域文化商社として、土地性を紐解き、流通を担い、交流を生み、風景をつなぐ」をコンセプトに事業を展開しており、文化と風景をつなぐ循環の創出を目指している。伝統的な町家を改修した旧丸林本家、旧寺崎邸、旧大坪茶舗の3つの店舗を中心に筑後地方だけでなく、九州の作家の作品や地域の特産品がずらりと並んでいる。主力商品は、現代風久留米絣のもんぺとその型紙である。

筑後地方を中心に近隣の場と人の魅力を発信し続けており、物販だけでなく、作り手や地域の人々の声に耳を傾けながら、地域文化を継承するシステムを構築することにも力を入れている。

八女市 うなぎの寝床（旧丸林本家）

八女市 うなぎの寝床（旧寺崎邸）

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	こだわりの場所を定期的に訪問する旅④	場所	南阿蘇村

筆者は南阿蘇村のペンション「ふらいんぐジープ」に 2000 年から毎年のように訪問している。最初に訪問した時にお土産としていただいたオオクワガタの幼虫を育て、それが成虫となって「交尾・産卵⇒卵から孵化して幼虫⇒成虫として羽化」という世代交代を繰り返しながら多くのオオクワガタを育ててきた。それをペンションに宿泊に来た子どもたちへのプレゼントとして使わせていただいたこともある。まさにオオクワガタが取り持つペンションとの縁である。

ふらいんぐジープは2016 年の熊本地震で被害を受けたが、約3ヶ月後に営業を再開。筆者も同年8月に訪れ再会を喜び合った。熊本地震を乗り越えてのオーナー夫妻の前向きな考え方は、筆者にも大変参考になり、「オオクワガタから始まる縁」を「熊本地震からの復興へと向かう縁」に変えて、今後もペンションのオーナー夫妻との交流を深めていきたいと考えている。

南阿蘇村　ペンション「フライングジープ」（熊本地震後に再開してから1ヶ月後の 2016 年8月訪問時）

南阿蘇村　ペンション「フライングジープ」（2018 年8月訪問時）

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	こだわりの場所を定期的に訪問する旅⑤－１	場所	東峰村

筆者の家族が、九州の優れたものを応援する「消費者と企業のわいわい塾」（㈱ビスネット主催）の会員で、毎月１回程度の催し（商品・サービスの話や企業の想いを直接聞ける場）に参加しており、そこで得た情報を基に、筆者も実際にこだわりの商品やサービスを提供する場所を訪問することもある。

㈲カネダイは、東峰村の山間部で長年にわたって麹と味噌を造っており、顔が見える関係を大切にしたいという方針から、店舗に商品を置かずに通販で販売している。自分たちの目が届く範囲で獲れた地元・福岡県産に限定した大粒大豆や米にこだわって商品を造っており、筆者も時々現地に行って麹や味噌等を購入している。また、その際に東峰村の魅力スポット（日本棚田100選に選定されている竹棚田、JR日田彦山線にかかる鉄橋等）を巡っている。 （次ページに続く）

東峰村にある㈲カネダイの蔵

東峰村　日本の棚田 100 選に選定されている竹棚田

東峰村　JR 日田彦山線にかかる宝珠山橋梁（左）と栗木野橋梁（右）

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	こだわりの場所を定期的に訪問する旅⑤－２	場所	朝倉市

（次ページから続く）

また、朝倉市の㈱藤井養蜂場にも、はちみつ祭りが開催される5月・9月の他、秋月の桜や紅葉が見頃の頃に訪問している。わいわい塾の開催レポートによると、「藤井養蜂場では、花の時期を追いかけて、ミツバチと一緒に毎年種子島から釧路まで大転地を繰り返しながら採蜜している。旅をしながら採取した蜂蜜は、濾過をするだけで、あとは一切手を付けないということで、風味、味、色がそのままの状態のものを自社工場で品質検査を行い、容器へ充填している。生産から販売まで一貫して行っているため、はちみつの純粋さを損なうことがない。」とのことである。

また、藤井養蜂場を訪問した際には、すぐ近くにある三連水車や歴史的な町並みが息づく秋月を訪問している。

朝倉市にある㈱藤井養蜂場

藤井養蜂場のすぐ近くにある三連水車（左）と三連水車近くで見かけた彼岸花（右）

秋月　桜の満開の頃（左）、紅葉が見頃を迎えた頃（右）

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	出張先での思いがけない発見の旅①	場所	別府市

いろいろな地域を歩いて観察してみると、ふとした発見をすることがある。その一つが別府石を使った塀である。筆者は仕事で別府市の上人ヶ浜温泉に行った時に、周辺の住宅地で数々の石積み塀を見かけたが、これこそが地域に根ざした景観なのではないかと直感した。

別府では別府駅から山の手にかけて多くの石塀を見かけるが、調べてみると大正時代前後に別荘地や高級住宅地が盛んに造成された時に掘り出された別府石（鶴見山が噴火した時の角閃安山岩が朝見川や境川を下り丸石となってできた小石）が塀として使われたとのことである。

建物は建て替わっても塀を統一することで、多様性の中にも統一感と連続性の感じられる景観が実現でき、それが地域の個性になっていくのである。

別府市　上人ヶ浜温泉周辺の住宅地で見かけた別府石の塀

別府市　別府駅から山の手で見かけた別府石の塀

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	出張先での思いがけない発見の旅②	場所	対馬市

2018 年5月に対馬を初めて訪れた時に石の文化をすぐに感じることができた。空港から移動中のレンタカーから見える風景はいかにも地盤が固い地形であり、そこから取れる石を使った建造物があるのではないかと容易に推測できた。実際に厳原の萬松院や周辺を歩いてみると石の文化が息づいていることがわかった。

調べてみると朝鮮半島との貿易で栄えた宗氏の城下町「厳原」は度重なる火災で困っており、火災の延焼を防ぐために昔の町割に沿って高い石垣が築かれたとのことである。石垣をよく見ると、火に焙られた痕跡があるものもあり、火災から厳原の町を守ったことがわかる。また、石垣には厳原周辺で採掘された四角に切られた石英斑岩が使われている。元々は白い石であるが、時間の経過とともに浮き出した褐色の鉄錆と灰色の苔が独特の味わいを創出している。

対馬市 厳原でそこかしこに見られる石垣

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	出張先での思いがけない発見の旅③	場所	熊本市、長崎市等

煉瓦造りの建造物についても予期せぬ場所で発見することがある。煉瓦造りの建造物は近代化とともに日本に導入されたが、教会堂等の文化財クラスだけでなく、注意深く見てみると、身近な場所で幕末から明治の面影を残す煉瓦造りの建物や塀を発見することができる。

なかには外観からは煉瓦造りの建物に見えないものもあったり、こんな場所にどうして煉瓦造りの塀が集積した住宅地があるのかと思わぬ発見をすることもある。煉瓦の積み方が異なっているのも、見ていて楽しいものである。

熊本市 防火壁の役割を果たしている町家の赤煉瓦の塀（左）
長崎市 外からは煉瓦造りに見えない大浦天主堂（右）

糟屋郡須恵町 旅石で見かけた赤煉瓦造りの塀が続く住宅地

みやき町 JR 中原駅周辺で見かけた製蝋工場の名残の赤煉瓦造りの煙突（左）
宗像市 JR 東郷駅周辺で見かけた線路をくぐる赤煉瓦造りのトンネル（右）

大テーマ	モノ、ヒト、コト（ストーリー）		
テーマ	まちづくり活動を通した思いがけない再会の旅	場所	倉敷市、郡山市等

筆者は地域のまちづくり活動や小さなまち旅を実践する中で、思いがけない人と再会することもある。町並み保存で全国的に活躍されている刈谷勇雅氏とは 2013 年に岡山県倉敷市で開催された第36回全国町並みゼミ倉敷大会で約20年振りに再会した（刈谷氏が京都市役所在籍中の1994年に御供所(ごくしょ)のまちづくり関係で訪問）。また、大学卒業後に勤務した会社で一時同じ現場事務所にいた宗像剛氏と、(公財)日本建築士会連合会主催の第8回まちづくり賞のプレゼンテーションを機会に2014年に福島県郡山市で28年振りに再会した。

最近では、唐津街道姪浜まちづくり協議会時代に取材や記事を通じて、協議会の活動や姪浜の魅力発信に多大な支援をいただいた西日本新聞社の濱口妙華氏と 2018 年の熊本城の復興過程の鯱設置のセレモニーで再会した。こうした出会いを今後も大切にしていきたい。

倉敷市 第36回全国町並みゼミ倉敷大会（2013年9月）

郡山市 (公財)日本建築士会連合会主催の第8回まちづくり賞のプレゼンテーション（2014年10月）

熊本市 熊本城復興過程の鯱設置のセレモニー（2018年4月）

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本地震の脅威を実感する旅①－１	場所	熊本市

筆者は熊本地震後、大学時代の思い出の多い熊本のことが気にかかり、積極的に熊本県内を訪問している。被害を受けている熊本の現状と復興の過程をしっかり目に焼き付けておきたいからである。ちょうど熊本地震前の 2016 年3月中旬～4月上旬にかけて2回、熊本地方や阿蘇地方に出かけ、熊本城や阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村等を見てきたばかりだった。訪問した先々の場所が大きな被害を受け、様変わりしてしまった。主要な観光地を結ぶ道路も閉鎖され、観光客も激減している。地震前とは違う光景が広がっていた。

熊本城には同年6月、南阿蘇村、阿蘇市、益城町には8月、新町・古町には 12 月に訪問し、改めて熊本地震の脅威を実感した。

熊本市 熊本城の被害状況（2016 年6月。右下のみ熊本大神宮）

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本地震の脅威を実感する旅①－２	場所	阿蘇市、南阿蘇村

筆者は熊本地震後、大学時代の思い出の多い熊本のことが気にかかり、積極的に熊本県内を訪問している。被害を受けている熊本の現状と復興の過程をしっかり目に焼き付けておきたいからである。ちょうど熊本地震前の 2016 年3月中旬～4月上旬にかけて2回、熊本地方や阿蘇地方に出かけ、熊本城や阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村等を見てきたばかりだった。訪問した先々の場所が大きな被害を受け、様変わりしてしまった。主要な観光地を結ぶ道路も閉鎖され、観光客も激減している。地震前とは違う光景が広がっていた。

熊本城には同年6月、南阿蘇村、阿蘇市、益城町には8月、新町・古町には 12 月に訪問し、改めて熊本地震の脅威を実感した。

阿蘇市　阿蘇神社の被害状況（2016 年8月）

南阿蘇村　阿蘇大橋付近の被害状況（上・中：2016 年8月、下：2017 年4月）

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本地震の脅威を実感する旅①－３	場所	南阿蘇村、益城町

筆者は熊本地震後、大学時代の思い出の多い熊本のことが気にかかり、積極的に熊本県内を訪問している。被害を受けている熊本の現状と復興の過程をしっかり目に焼き付けておきたいからである。ちょうど熊本地震前の 2016 年3月中旬～4月上旬にかけて2回、熊本地方や阿蘇地方に出かけ、熊本城や阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村等を見てきたばかりだった。訪問した先々の場所が大きな被害を受け、様変わりしてしまった。主要な観光地を結ぶ道路も閉鎖され、観光客も激減している。地震前とは違う光景が広がっていた。

熊本城には同年6月、南阿蘇村、阿蘇市、益城町には8月、新町・古町には 12 月に訪問し、改めて熊本地震の脅威を実感した。

南阿蘇村　東海大学周辺の学生村の被害状況。2階建てのアパートの1階が押し潰されている。（2016 年8月）

益城町　アパートや戸建住宅の被害状況。2階建てのアパートの1階が押し潰されたり、戸建て住宅が倒壊している。（2016 年8月）

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本地震の脅威を実感する旅①－４	場所	熊本市

筆者は熊本地震後、大学時代の思い出の多い熊本のことが気にかかり、積極的に熊本県内を訪問している。被害を受けている熊本の現状と復興の過程をしっかり目に焼き付けておきたいからである。ちょうど熊本地震前の 2016 年3月中旬～4月上旬にかけて2回、熊本地方や阿蘇地方に出かけ、熊本城や阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村等を見てきたばかりだった。訪問した先々の場所が大きな被害を受け、様変わりしてしまった。主要な観光地を結ぶ道路も閉鎖され、観光客も激減している。地震前とは違う光景が広がっていた。

熊本城には同年6月、南阿蘇村、阿蘇市、益城町には8月、新町・古町には 12 月に訪問し、改めて熊本地震の脅威を実感した。

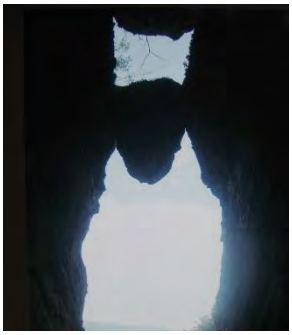
熊本市 新町・古町の町家。 熊本地震から8ヶ月後で改修が進んでいた（2016 年 12 月）。

熊本市 新町・古町の町家（2016 年 12 月）。 その後解体され、現在は高層のホテルが建設されている（左）。その後解体され、現在は空地となっている（右）。

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本地震の脅威を実感する旅②	場所	南阿蘇村、熊本市

筆者は熊本地震前の 2016 年３月に免の石を訪問したが、事前予約が必要とのことでこの時は見学を断念し、次回訪問時に登ろうと決めていた。しかし、予期せぬ地震で免の石が落石。2018 年５月に再訪し、熊本地震の脅威を改めて実感した（※P304「前向き思考の旅」のテーマでも紹介）。

また、南阿蘇村周辺の山々の土砂崩れの状況や道路の被害状況、阿蘇大橋近くの崖沿いに建っていたコンビニの被害状況を見て、改めて地震の怖さを実感した。この他、熊本県内最古の洋風建築である熊本洋学校教師ジェーンズ邸も倒壊した。



南阿蘇村　落石前の免の石（左、熊本地震前の現地の案内板の写真）、落石後の免の石（右、2018 年５月）

南阿蘇村　周辺の山の土砂崩れの状況（2017 年４月）

南阿蘇村　阿蘇大橋付近の崖地沿いの道路の陥没状況（左）、その道路近くにあったコンビニの駐車場の被害状況（右）。（2017 年４月）

熊本市　熊本地震前のジェーンズ邸（左、出典：熊本市文化財課ホームページ）。熊本地震で倒壊し（右、2018 年３月）、現在は移転先で復元工事が進められている。

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅①－１	場所	熊本市

筆者は 2016 年６月の熊本城訪問をきっかけとして「熊本の復興の過程を巡る旅」を始めた。熊本城には 2021 年３月末までに 25 回訪問し、復興の過程と来訪者の喜びの姿を目の当たりにしてきた。熊本地震から１年経った 2017 年４月には満開の桜を見に訪れたが、多くの市民や観光客も訪れ、賑わいを見せており、復興の足音を強く感じた。

また、同年５月の訪問時には、天守閣再建に向けて一部解体工事が始められていた。城内にある加藤神社では、復興工事の様子をバックに結婚式の記念写真の撮影が行われていた。「新郎新婦も熊本城の復興とともに今後の人生を歩んでいくのだろう。」と筆者も思わず記念写真撮影のシャッターを切っていた。

（次ページに続く）

熊本市 熊本城 熊本地震から1年後の桜が満開の頃。石垣と桜の美しさが印象的であった。多くの来訪者の笑顔から復興の足音を強く感じた（2017 年４月）。

熊本市 熊本城 天守閣再建に向けて一部解体工事が始まった頃（左）。「奇跡の一本石垣」で知られる飯田丸五階櫓も櫓倒壊防止のための崩落石材回収工事が進められていた（右）。（2017 年５月）

熊本市 熊本城 建築士会主催の平成 30 年度九州ブロック研究集会「建築士の集い」熊本大会に参加。ボランティアガイドの方から熊本城の復旧状況等について説明を受けた（2018 年６月）。

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅①－２	場所	熊本市

（次ページから続く）

その後もマスコミを通して得た情報を基に定期的に熊本城を訪問し、復興の過程を見てきた。特筆すべきことは、熊本市が復興の過程を市民に目に見える形で伝えていることであり、節目節目にマスコミに公開し、それがニュースとして市民に伝わることで市民が復興の過程に興味を持てるようにしていることである。筆者もそのニュースを見て、その都度訪問している。

熊本城全体の復旧完了は 2037 年度と計画されている。私は現在 63 歳であり、熊本城が復興される頃には 80 歳近くになっているが、復興の過程を見に今後も何度も訪問したいと考えている。

熊本市 熊本城 筆者も「熊本城復元整備基金 復興城主」として熊本市長より感謝状を贈呈された（左、2018 年２月）。復興過程の天守閣の鯱設置セレモニーにも参加（右、2018 年５月）。

熊本市 熊本城 特別公開第１弾に参加。復興の過程を間近に見ることができた（2019 年 10 月）。

熊本市 熊本城 特別公開第２弾に参加。二様の石垣や瓦の葺き替えの様子を間近に見ることができた（2020 年６月）。

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅②－１	場所	熊本市

筆者は町家や町並みに関心があり、熊本市都心部の新町・古町の町家の復興の過程を見てきた。熊本地震後に最初に訪問したのが 2016 年 12 月。その時には既に改修に着手したものもあれば、傾いたり、屋根や壁が剥がれ落ちたりしたままのものもあった。その後、解体され高層のマンションやホテルに建て替わったものもあれば、駐車場として利用されているものもある。

その一方、行政や財団の財政的支援を得ながら、NPO や市民等の粘り強い取り組みにより、改修されたものも見てきた。その際、熊本大学時代の先生方や先輩、同級生等が様々な場面で活躍する姿も見て、「文化都市・熊本」の歴史は脈々と受け継がれていると感じた。

熊本市 新町の吉田松花堂の改修過程

熊本市 古町の塩胡椒、N･H ピュアリー等の改修過程

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅②－２	場所	熊本市

筆者は町家や町並みに関心があり、熊本市都心部の新町・古町の町家の復興の過程を見てきた。熊本地震後に最初に訪問したのが 2016 年 12 月。その時には既に改修に着手したものもあれば、傾いたり、屋根や壁が剥がれ落ちたりしたままのものもあった。その後、解体され高層のマンションやホテルに建て替わったものもあれば、駐車場として利用されているものもある。

その一方、行政や財団の財政的支援を得ながら、NPO や市民等の粘り強い取り組みにより、改修されたものも見てきた。その際、熊本大学時代の先生方や先輩、同級生等が様々な場面で活躍する姿も見て、「文化都市・熊本」の歴史は脈々と受け継がれていると感じた。

熊本市 古町の西村邸の改修過程

熊本市 古町の清永本店の改修過程

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅②－３	場所	熊本市

筆者は町家や町並みに関心があり、熊本市都心部の新町・古町の町家の復興の過程を見てきた。熊本地震後に最初に訪問したのが 2016 年 12 月。その時には既に改修に着手したものもあれば、傾いたり、屋根や壁が剥がれ落ちたりしたままのものもあった。その後、解体され高層のマンションやホテルに建て替わったものもあれば、駐車場として利用されているものもある。

その一方、行政や財団の財政的支援を得ながら、NPO や市民等の粘り強い取り組みにより、改修されたものも見てきた。その際、熊本大学時代の先生方や先輩、同級生等が様々な場面で活躍する姿も見て、「文化都市・熊本」の歴史は脈々と受け継がれていると感じた。

熊本市 古町の珈琲回廊（コーヒーギャラリー）の改修過程

熊本市 古町のPS（ピーエス）オランジュリの改修過程

【参考】熊本市新町・古町地区の現状

（2017 年 12 月までに執筆したコラムより）

熊本市の城下町である新町・古町地区は、1877 年の西南戦争の際に激戦地となり建物は消失したが、その後、町割りは復元され、多くの町家や寺院が残り、それらを活かした景観づくりの取り組みが地元の市民団体「新町・古町 町屋研究会」を中心に行われている。

しかし、都心部ということもあり、2007 年に 430 軒あった町家は、毎年約 10 軒ずつ減少し、2016 年には 335 軒となっていた。それに追い打ちをかけるように熊本地震で多くの町家が被害を受け、解体を余儀なくされている。2018 年には町家数は 200 軒近くまで減少すると考えられている。また、更地化も進み、マンションへの転用も進んでいくのではないかと危惧されている。こうした中で、城下町という地域性を活かしたまちづくりが模索されている。

熊本地震で傷ついた町屋 美術館へ

熊本地震で損壊した熊本市内の築130年になる町屋の一部が、美術館に移築される。修復への特別な公的補助がなく次々に姿を消しているが、地元の有志が「伝統建築の姿を残したい」と計画。25日に移築部分の取り外しが始まった。

移築されるのは、中央区の古町地区にある森本襖表具材料店。1886（明治19）年の建築で店舗部分は約6㍍四方だが、居間や中庭へと約50㍍の奥行きがある「職住一体」だ。地震で傾き、応急危険度判定では「危険」と判定された。

解体は全額公費で賄えるが、伝統建築の修復には多額の費用がかかるため、店主の森本多代さん(58)は解体を決めた。

「被災記憶と伝統、伝える」

町屋の一部を移築するための作業。1階部分の店構えを美術館に移して展示する計画だ＝25日、熊本市中央区

地区住民らでつくる「新町・古町町屋研究会」の宮野桂輔さん(43)は「少しでも残せないか」と、知人を通じて私立島田美術館（熊本市西区）に相談。緊急対応として、館内へ移築し公開をめざすことになった。美術館事務局長の清川真潮さん(44)は「展示できれば伝統文化と地震の記憶、両方を伝えられる」と話す。

移築するのは、店構え部分の幅約6㍍、奥行き約2㍍。伝統的なくぐり戸や、商談や井戸端会議をする折りたたみ式の腰掛けなどを残す計画だ。森本さんは「少しでも、生まれ育った家の姿を残してもらえてうれしい」と話す。

25日は研究会メンバーや大工らが移築部分の瓦や戸などを外した。作業に先立ち森本さんは四方に酒と塩を捧げ、家に「ありがとう。お疲れさま」と言葉をかけ、涙を流した。「あれだけの地震だったのに倒れず、一生懸命私を守ってくれた」

熊本城の城下町として形成された新町・古町地区では、地震前にあった町屋343棟のうち282棟が損壊。解体が進み、更地が目立つ。（平井良和）

デジタル版に動画

H29.5.26 朝日新聞

古町地区の町家に関する記事(2017 年5月 26 日)
左の4枚の写真はいずれも筆者撮影（2017 年5月 27 日）

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅③	場所	阿蘇市

阿蘇神社にも熊本地震後は毎年訪問している。熊本地震前の 2016 年３月に訪問した時には1ヶ月後の大規模地震は到底想定していなかったが、２度の地震で重要文化財である楼門が倒壊するなど神社内の施設が大きな被害を受けた。楼門の両サイドにある還御門と神幸門は 2018 年度に部分解体修理が完了している。倒壊した拝殿及び翼廊は2021 年６月の完了を目標に再建工事が進められている。

また、楼門は 2018 年度までに解体格納工事が完了し、2023 年度の完了を目指して復旧工事が進められている。2020 年８月に訪問した時には仮囲いに楼門の写真がプリントされており、改修を進めている関係者の粋な計らいを感じた。

阿蘇市 阿蘇神社 拝殿の改修過程。2021 年６月の完了を目指して再建工事が進められている。

阿蘇市 阿蘇神社 楼門の改修過程。解体格納工事を経て、現在は 2023 年度の完了を目指して復旧工事が進められている。

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅④	場所	南阿蘇村

阿蘇大橋が崩落した周辺にも毎年訪問し、斜面が崩壊した山の対策の状況や九州東海大学農学部があった黒川地区の状況を見ている。崩壊した斜面は、安全対策はもちろん、自然植生の種子飛来・発芽、定着による阿蘇くじゅう国立公園にふさわしい緑化を目指して対策工事が進められている。

また、黒川地区には九州東海大学の学生が多く暮らしていたが、熊本地震により多くのアパートや住宅が倒壊し、解体・更地化が進み、町並みだけでなく地域コミュニティが大きく変貌した。筆者は2019 年4月に開催された復興イベント「南阿蘇・黒川ウォーク」に参加し、地域の方々や東海大学の学生と交流する中で、黒川地区の震災から3年の現状と復興への歩みを知ることができ、大変有意義な一日となった。

南阿蘇村　阿蘇大橋が崩落した斜面の安全対策及び緑化対策工事の進捗状況

南阿蘇村　黒川地区での復興イベント「南阿蘇・黒川ウォーク」に参加し、地域の方や学生から復興への歩み等について説明を受けた（2019 年4月）。

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅⑤	場所	南阿蘇村

熊本地震では鉄道も甚大は被害を受け、地域の方々の生活に多大な影響を与えた。南阿蘇鉄道（立野～高森間 17.7km）は熊本地震から3ヶ月後の 2016 年7月に一部区間（中松～高森間 7.1km）で開通。筆者は 2019 年 11 月と 2020 年5月に乗車したが、職員だけでなく沿線の住民の皆さんが地域に誇りを持っていることをいろいろな場面で感じることができた。残りの区間（立野～中松間 10.6km）は 2023 年夏の全線開通を目標に整備が進められている。

また、JR 豊肥本線は熊本地震で肥後大津～立野～阿蘇駅間（27.3km）で不通になっていたが、2020 年8月8日に全線復旧。筆者も復旧から8日後の8月 16 日に乗車し（阿蘇～立野往復）、久し振りに車窓からの風景と立野駅でのスイッチバックを楽しんだ。コロナ禍の中での全線復旧となったが、沿線の方々の喜びで溢れていた。

南阿蘇村～高森町 南阿蘇鉄道（中松～高森駅間）に久し振りに乗車。車窓からの風景と沿線の方々の歓迎に感動した（2019 年 11 月）。
※P290 の「ローカル線の旅」のテーマでも紹介

南阿蘇村～阿蘇市 JR 豊肥本線（立野～阿蘇駅間）に久し振りに乗車。車窓からの風景と立野駅でのスイッチバックを楽しんだ。崩落した阿蘇大橋も見ることができた（2020 年8月）。

大テーマ	熊本の復興の過程を巡る旅		
テーマ	自然の治癒力を実感する旅	場所	熊本市、阿蘇市

熊本地震では池を中心とする優美な回遊式庭園で知られる水前寺成就園の池（約1万㎡）もほとんど干上がり、底が露出していたが、少しずつ水が戻り始め、地震から1ヶ月後に公開を再開した。水が枯れた原因や水が戻った理由は不明であるが、地震の影響で湧水の水脈が移動した可能性も推測されている。

また、秀麗な容姿の火山として知られる阿蘇の米塚にも山頂の火口縁等に多くの亀裂ができていたが、周囲から見る限りでは徐々に回復しているように思える。烏帽子岳や杵島岳では山の斜面が崩壊し、山肌が露出するなどの被害があったが、時間の経過とともに美しい景観を取り戻しつつある。

阿蘇へのアクセスも 2021 年3月7日の国道 325 号新阿蘇大橋の開通により、被災した阿蘇地域の幹線道路の復旧はすべて完了した。筆者は今後も、阿蘇の四季折々の美しい風景を見ることを小さなまち旅のテーマの一つにしていきたい。

熊本市 水前寺成就園 熊本地震後に枯れた水も戻り、池を中心とした回遊式庭園として優美な風景を見せている。

阿蘇市 米塚 熊本地震でできた亀裂は徐々に回復し、四季折々の表情を見せている。

阿蘇市 草千里から見た烏帽子岳（左）と杵島岳（右）。熊本地震で斜面が崩壊し、山肌が露出したが、時間の経過とともに美しい景観を取り戻しつつある。

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）」の旅①	場所	福岡市

筆者の身近な「職・住・遊・活」の場である博多湾姪浜エリア（シーサイドももち～愛宕・愛宕浜・姪浜・生の松原～能古島～博多湾）を対象に、「眺望」「景観」「回遊」「歴史」「自然（海・山・松原）」「健康」「広域連携」「観光」「フットパス」等をテーマにまち歩きを実践している。

シーサイドももちは、住宅地開発（シーサイドももちクリスタージュ）や都市景観形成地区の指定に深く関わってきており、筆者の福岡市役所時代の思い出のフィールドであり、現在は身近なレクリエーションエリアの一つでもある。近代的な都市景観や建築物が特徴であるが、東西南北の緑道、河川沿いの緑道、海浜公園等の公共空間の他、民有地においても緑豊かな景観づくりが進められてきており、都市的な環境の中にも豊かな自然環境が形成されている。

愛宕浜海浜公園から見たシーサイドももち（左）、福岡タワーからの眺望（右）

よかトピア通りの街並み（左）、世界の建築家通りの街並み（右）

集合住宅地区の街並み（左）、室見川沿いの緑道（右）

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）」の旅②	場所	福岡市

室見川を挟んでシーサイドももちに隣接する愛宕・豊浜地区は、愛宕神社をはじめとした歴史資源や愛宕山、室見川といった自然資源が特徴である。筆者は姪浜に住んで 34 年になるが、今でもよく訪れるのが愛宕神社とその参道沿いにある観音寺、音次郎稲荷神社である。桜の咲く頃になると参道沿いの桜だけでなく、観音寺の桜、愛宕山観光道路沿いの河津桜、ケーブルカー山上駅跡付近の桜等が美しさを競演する。冬から初夏にかけては、各種のサギが飛来し営巣の風景を見ることができる。

また、豊浜団地を歩くと季節感豊かないろいろな花を楽しむことができる。室見川での初夏の潮干狩りの風景や冬の鴨の群れを見ることも楽しい。朝日や夕日の風景もきれいである。一般的な住宅地であっても、いろいろな個性を発見できるのである。

愛宕神社（左）、参道の桜並木（右）

愛宕神社参道沿いにある観音寺（左）、豊浜団地内の枝垂れ梅（右）

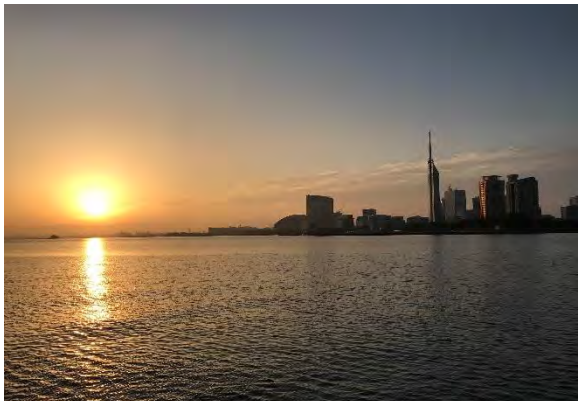
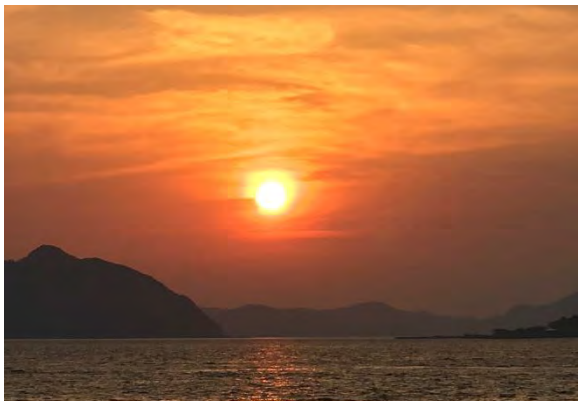
室見川での潮干狩りの風景（左）、室見川の夕景（右）

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）」の旅③	場所	福岡市

筆者が現在暮らしている愛宕浜地区は豊浜・姪浜地区の博多湾側に位置し、埋め立てによって生まれた比較的新しい街であり（1980 年代後半から住宅地開発）、博多湾に面した海浜公園と緑豊かな居住環境が特徴である。海浜公園ではウォーキングやランニングをする人、犬と散歩する人、釣りやサーフィンをする人などで賑わいを見せている。海浜公園からはシーサイドももちや能古島、志賀島等を臨むことができ、海に開かれた福岡の景観的な特徴を満喫できる場所でもある。朝日が昇る風景や夕日が沈む風景も愛宕浜ならではの風景である。

また、愛宕浜中央公園や地域を南北に縦断する緑道、外周の道路では樹木が成長し、季節感を演出している。普段何気なく過ごしているまちであるが、テーマを持ってまちを歩くといろいろな発見をすることができる。

福岡タワーから見た愛宕浜の街並み（左）、愛宕浜海浜公園（右）

愛宕浜海浜公園から見たシーサイドももちの朝景（左）、糸島方面の夕景（右）

愛宕浜地区の街路樹の紅葉

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	「博多湾姪浜　夢海道（回廊）＆海遊（回遊）」の旅④	場所	福岡市

唐津街道を中心とした姪浜地区には寺社、町家、路地、魚市場、古くからのお店等が息づき、福岡市内でも有数の歴史的環境を有している。しかし、近年の町家の減少やマンションの建設に歯止めがかからず、町並みが大きく変貌するとともに、多くのワンルームアパートの進出により古くからのコミュニティも大きく変化してきている。筆者はここで約 10 年間、まちづくり活動を実践してきたが、近年の町並みやコミュニティの変化には危機感を覚えている。

この地域を歩く機会は激減したが、歩く度に様々な課題が見えてくる。地域内にはまちづくりを標榜する団体がいくつかあるが、各団体の連携に加え、広域的な観点で地域を評価し、広域的エリアとして個性を打ち出していく必要がある。筆者が提唱する「博多湾姪浜　夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想」はこうした視点から生まれた構想でもある。

姪浜住吉神社（左）、興徳寺（右）

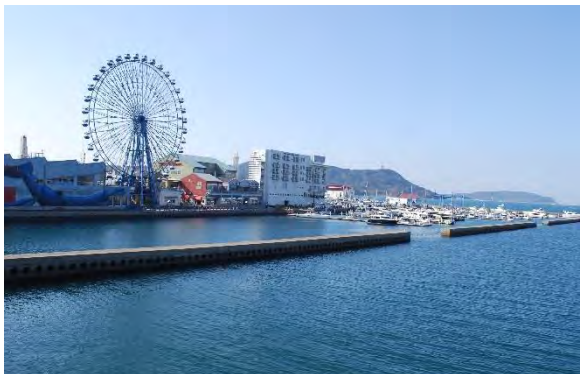
探題塚（左）、唐津街道沿いの西構口付近の町家町並み（右）

姪浜魚市場（左）、多くの高層マンションの進出による町並みの変貌（右）

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）」の旅⑤	場所	福岡市

名柄川を挟んで姪浜地区の西側に位置する小戸・生の松原地区。ここにはマリノアシティ福岡をはじめとする商業施設、小戸公園や小戸ヨットハーバー等のレクリエーション施設、小戸大神宮や元寇防塁跡等の歴史的資源があり、それらを回遊できる博多湾沿いの遊歩道等も整備されている。「都市」「自然」「歴史」の３つの要素を巡る福岡型のフットパスを展開できるエリアである。

また、小戸や生の松原の海岸から見た博多湾の景観はダイナミックであり、海、空、山、島のコントラストが素晴らしい。特に小戸の夕景はきれいであり、古くからの歴史を感じる瞬間でもある。博多湾を行き交うフェリーや漁船、ヨットの風景もこのエリアならではのものであり、筆者の身近なフットパスのコースの一つでもある。



マリノアシティ福岡（左）、小戸大神宮（右）

小戸の夕景（左）、生の松原元寇防塁（右）

生の松原（左）、生の松原から見た博多湾（右）

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）」の旅⑥	場所	福岡市

姪浜渡船場からフェリーで 10 分の能古島も筆者の身近なまち旅のエリアである。一番の見どころはアイランドパークであり、桜と菜の花のコントラストが美しい春、コスモスが咲き乱れる秋には毎年のように訪問している。夏のひまわりや冬の水仙など季節ごとに様々な花を楽しむことができる。また、そこで作られたサツマイモを使ったイモ天や能古島名産の甘夏 100%ジュースも久保田睦子さんらの手作りで本当に美味しい。

能古島にはこの他、白髭神社や永福寺、能古焼古窯跡、能許万葉歌碑、能古博物館等の魅力スポットがあり、フットパス感覚で回遊できる。また、能古島から見るシーサイドももちの景観は、「海に開かれたアジアの交流拠点都市・福岡」を象徴する景観である。自然探勝路から見え隠れする博多湾の風景は、大陸との関わりの深い福岡の歴史を感じさせる。

福岡タワーから見た博多湾と能古島（左）、能古島から見た博多湾とシーサイドももち（右）

季節ごとに様々な花を楽しめる能古島アイランドパーク（左）、白髭神社（右）

能古焼古窯跡（左）、自然探勝路（右）

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）」の旅⑦	場所	福岡市

今まで紹介してきた「シーサイドももち地区」「愛宕・豊浜地区」「愛宕浜地区」「姪浜地区」「小戸・生の松原地区」「能古島」をつなぐのが博多湾である。筆者は愛宕浜に暮らして 22 年になるが、これらの地区から見る博多湾の景観、博多湾から見る福岡の街並みは筆者のお気に入りの景観である。

オランダ出身で姪浜漁港に停泊するヨットで暮らして 30 年以上になるヤップ・モルダーさん夫妻は、世界 55 ヶ国を旅して博多湾、そして福岡、姪浜に魅了された方で「博多湾に帰ってくるとほっとする。博多湾から見る福岡の景観は素晴らしい。美しい海と山に囲まれた福岡が好き」と語っていた。

筆者は「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想」「福岡型フットパス構想」を提唱し、その実現に向けて身近なまち旅を実践している。

福岡タワーから見た博多湾、能古島、糸島半島（左）、博多湾を背景にした花火大会（右）

博多湾に浮かぶヨットの風景（左）、姪浜漁港の漁船が並ぶ風景（右）

筆者のマンションから見た博多湾の朝景（左）、博多湾から見た糸島方面の夕景（右）

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	お気に入りのフィールドを巡る旅①	場所	福岡市

福岡市内での筆者の身近なお気に入りのフィールドは、福岡市役所時代に都市景観形成地区の指定で関わってきた御供所(ごくしょ)地区であり、聖福寺、承天寺、東長寺等の歴史ある寺院、聖福寺周辺の路地、町家をリノベーションした店舗等をたびたび訪問している。休日でも仕事のある日でも気軽に立ち寄ることのできる場所であり、以前からの知人に出会うことも多い。

また、現在の仕事の関係で、景観形成地区指定の基準として筆者が提案した「町並み斜線」や「壁面線」を順守している建物に出会ったこともあるが、とても懐かしく、そして嬉しく思った。筆者にとっては思い出のフィールドであり、今後も福岡市有数の歴史的な環境を大切にしてほしい。

御供所(ごくしょ)地区　東長寺の枝垂れ桜（左）、承天寺の洗濤庭（右）

御供所地区　聖福寺山門（左）、聖福寺境内の路地（右）

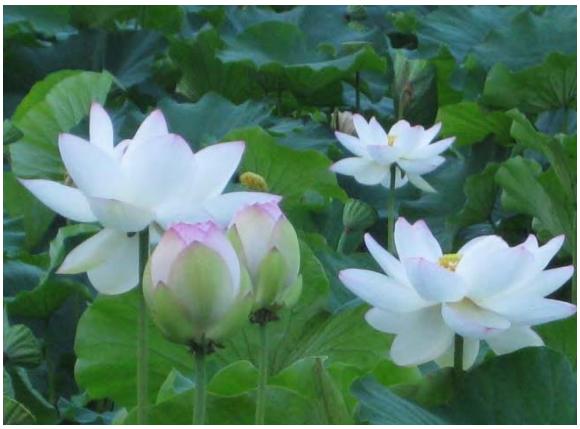
御供所地区　聖福寺勅使門と伝統的町家

御供所地区　伝統的町家（左）、町並み斜線や壁面線を考慮した新しい町家（右）

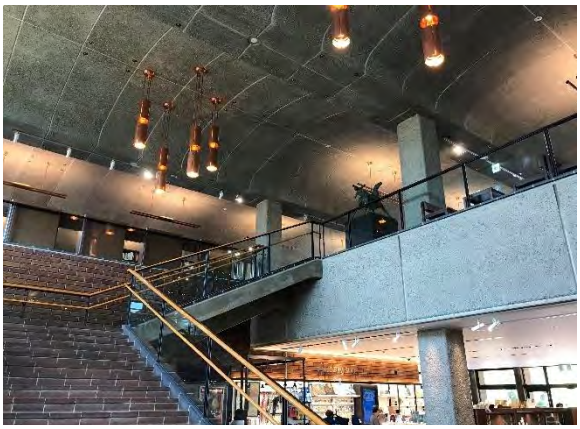
大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	お気に入りのフィールドを巡る旅②	場所	福岡市

舞鶴公園や大濠公園も筆者の身近なお気に入りのフィールドである。舞鶴公園は花や樹木を通して四季の変化を実感できる場所であり、梅の花、桜の花、蓮や水蓮の花、イチョウや桜の紅葉の時期等に訪れている。特に桜が満開の頃は、福岡城址の歴史的空間と様々な桜が見事に調和し、美しい風景を創出している。

大濠公園は気軽に散歩のできる空間であり、気持ちをリフレッシュしたり、福岡市美術館での美術鑑賞の際に訪れている。福岡市美術館は前川國男氏設計で、筆者も学生時代からよく訪問している建物である。2019 年3月にリニュアルオープンしたが、当初の設計の考え方やデザインが継承されるとともに、大濠公園から直接アプローチできるようになり、大濠公園と一体感のある開放的な空間となった。



舞鶴公園の四季巡り：桜が満開の頃（上）、紅葉の頃（中）、蓮の花の咲く頃（下）



大濠公園（上）、池越しに見た福岡市美術館（中）、福岡市美術館の内部（下）

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	職場近くや仕事ついでのちょこ旅①	場所	福岡市

現在の勤務先（福岡市中央区薬院）近くを散策したり、仕事の関係で外出した時にも魅力的な空間や気になる空間に出会うことがある。薬院駅近くでは、高層ビルの公開空地に整備されたケヤキ並木が筆者のお気に入りの空間であり、新緑（初夏）⇒深緑（盛夏）⇒紅葉（秋）⇒落葉（冬）が季節感を演出している。ベンチに腰掛けて食事や会話を楽しんでいる人々を多く見かけるが、快適な空間である証である。

また、小鳥神社（中央区警固）は住宅街の小高い丘の上にある神社で、鎮守の森として都会のオアシス的な空間となっている。古来より薬院の地に鎮座する古社で、本殿や拝殿等は国の登録有形文化財に指定されている。そして、昼休みによく散策する今泉周辺には多くの寺社がある一方、狭い路地におしゃれで隠れ家的な建ち並び、昼夜問わず賑わいを見せている。

薬院 高層ビルの公開空地に整備されたケヤキ並木 新緑の頃（左）、紅葉の頃（右）

警固 鎮守の森として都会のオアシス的空間となっている小鳥神社

今泉 国体道路に面した若宮神社（左）、路地沿いにあるお洒落な店舗（右）

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	職場近くや仕事ついでのちょこ旅②	場所	福岡市

薬院から少し足を延ばした浄水通りや六本松、鳥飼にも筆者がよく訪れる空間がある。浄水通り周辺は特別緑地保全地区をはじめとする緑豊かな環境が特徴で、おしゃれな建物も多く散策には絶好の場所であり、昼休みや仕事での徒歩ルートとして利用している。

また、地下鉄の薬院大通駅から2駅隣りの六本松には、桜の咲く時期によく訪れる場所がある。西日本シティ銀行ココロ館の桜並木、九大六本松跡地に建った裁判所周辺の桜並木、そしてそれらを散策中に見つけた桜並木はいずれも古くからある桜で、筆者は「残した桜、残った桜」として分類している。建物は建て替わり環境は変わっても変わらないもの、それがこれらの桜であり、地域にとっては「記憶の継承」となっていくのである。

平尾浄水町にある浄水特別緑地保全地区（左）、浄水通りの緑豊かな新しいマンション（右）

鳥飼 西日本シティ銀行ココロ館の桜並木（左）、住宅街で見かけた桜並木（右）

六本松 裁判所周辺の桜並木（左）、散策時によく利用する蔦屋書店（右）

大テーマ	身近なまち旅		
テーマ	職場近くや仕事ついでのちょこ旅③	場所	福岡市、熊本市

仕事の関係で外出した時にもいろいろなテーマに沿った空間に出会うことがある。その一つがまちなかのニッチ的な空間であり、軒下空間がバス停の役割を果たしていたり、カフェの一角になったりしているものを目にすることがある。筆者の学生時代に「雨宿りの空間」という建築コンペがあり、その時の最優秀賞が塀をくり抜いて雨宿りの空間としていたと記憶している。

また、神社という空間を通して「ハレとケ」を体験することもある。例えば、早良区藤崎にある猿田彦神社は普段は本当に静かであるが、「庚申祭」の日は猿面や福笹等を求める人々で大変な賑わいを見せる。普段から多くの人々で賑わっている博多区上川端町の櫛田神社も博多祇園山笠の時は祭りの空間化とし、普段とは違う賑わいを見せる。まちなかのちょっとした空間を通して、地域や建築のことを考えることも筆者の小さなまち旅のテーマの一つである。

福岡市と熊本市のまちなかで見つけたニッチ的空間

福岡市 猿田彦神社 普段の様子（上）、初庚申祭の様子（下）

福岡市 櫛田神社 普段の様子（上）、博多祇園山笠追い山ならしでの櫛田入りの様子（下）